

第一百話 野戦部隊指揮官、斯くありたし 宮崎繁三郎中将

私事ながら、旧軍で言えば歩兵であった小生等の理想的な軍人像として、宮崎繁三郎中将はその筆頭に挙げられる。その宮崎中将の戦場における姿を点描し、指揮官のありようへの修養の参考に供したい。

I 宮崎繁三郎中将 略歴

1892 (M25) 1月生まれ 1965 (S40) 8月 没 73歳 岐阜県生まれ 陸士26期 陸大卒 満州事変、ノモンハン事件 (第五十一話参照) 及びインパール作戦 (第三十三話参照) に参加、後に第五十四師団長 陸軍中将 士官学校の成績 230/737番 陸代の成績 29/64番 (中の上クラス)

2 満州事変

1933年熱河作戦 (熱河省、河北省に対する軍事行動) に歩兵大隊長として軍功を挙げ、金鵄勲章を受章した。内地帰還後は、政治には全く関与しなかった。

3 ノモンハン事件：歩兵第16連隊長 (新発田) として参戦

ソ連軍の圧倒的な戦力に友軍部隊が壊滅する中、16連隊は最後まで奮闘、唯一生き残る。夜襲により奪還した“977高地”に対するソ連軍の猛攻に耐え、二日後に、宮崎は石工出身の兵士に命じ、十数個の石に部隊名と日付を刻み付けて、占領地の地中に埋め込んだ。これがその後の国境画定交渉に有利に働いた。『ノモンハン唯一の勝利部隊』

4 インパール作戦：31師団の歩兵団長 (少将) として参戦 (兵力約3000人)

- ①自らも荷を背負い、部隊の先頭にたって、要衝コヒマを急襲・攻略
- ②現地死守を命ぜられ敵中孤立、巧みな遅滞戦術で友軍退却の時間的余裕17日間獲得
- ③撤退命令受領：殿軍の任務完遂、負傷者の収容、戦死者の埋葬、負傷兵の担架を担ぎ、食糧を分け与えた。
- ④他部隊に対しても同様の扱い

『戦場における指揮官の卓越した統率』

5 ビルマ戦線：第54師団長として参戦

インパール作戦後の1945年4月、宮崎中将はビルマ戦線の第54師団長として、第三次アラカン作戦 (完作戦) に臨んだ。英軍師団を壊滅させる等の戦功もあるが、特筆すべきは、上級司令部であるビルマ方面軍司令官の突然の逃亡により敵中に完全孤立した際の宮崎の戦いぶりだ。

已むなく、師団分散して敵中突破を企図、多くの兵を失うも、最後まで果敢に戦い、脱出に成功した。敗戦後、英軍捕虜となるが、部下に対する不当な扱いには断固として抗議したという。

6 戦後 都下北沢に瀬戸物屋を営む。

決して功を誇らず、死ぬ間際も、朦朧とした意識の中で、敵中突破部隊を案じ、多くの部下を死なせてしまった忸怩たる思いと責任感を抱いていたと云われる。

*私見

- ・部下想い、「日本軍の良心」とも呼ばれた名将
- ・学校の成績、必ずしも指揮官適否に関係せず。
- ・戦場での野戦部隊指揮官としての功罪こそ軍人の最も重要な評価たるべき
- ・陸軍中枢部の幕僚としての育成も野戦部隊指揮官育成も共に重要で、何れかの偏重は宜しからず、人事評価も同様
- ・人間的な魅力なき者は卓越した野戦部隊指揮官にはなり得ず。
- ・勇将、名将は、物静かな紳士
- ・如何な状況でも責任を放棄せず完遂する烈々たる闘魂